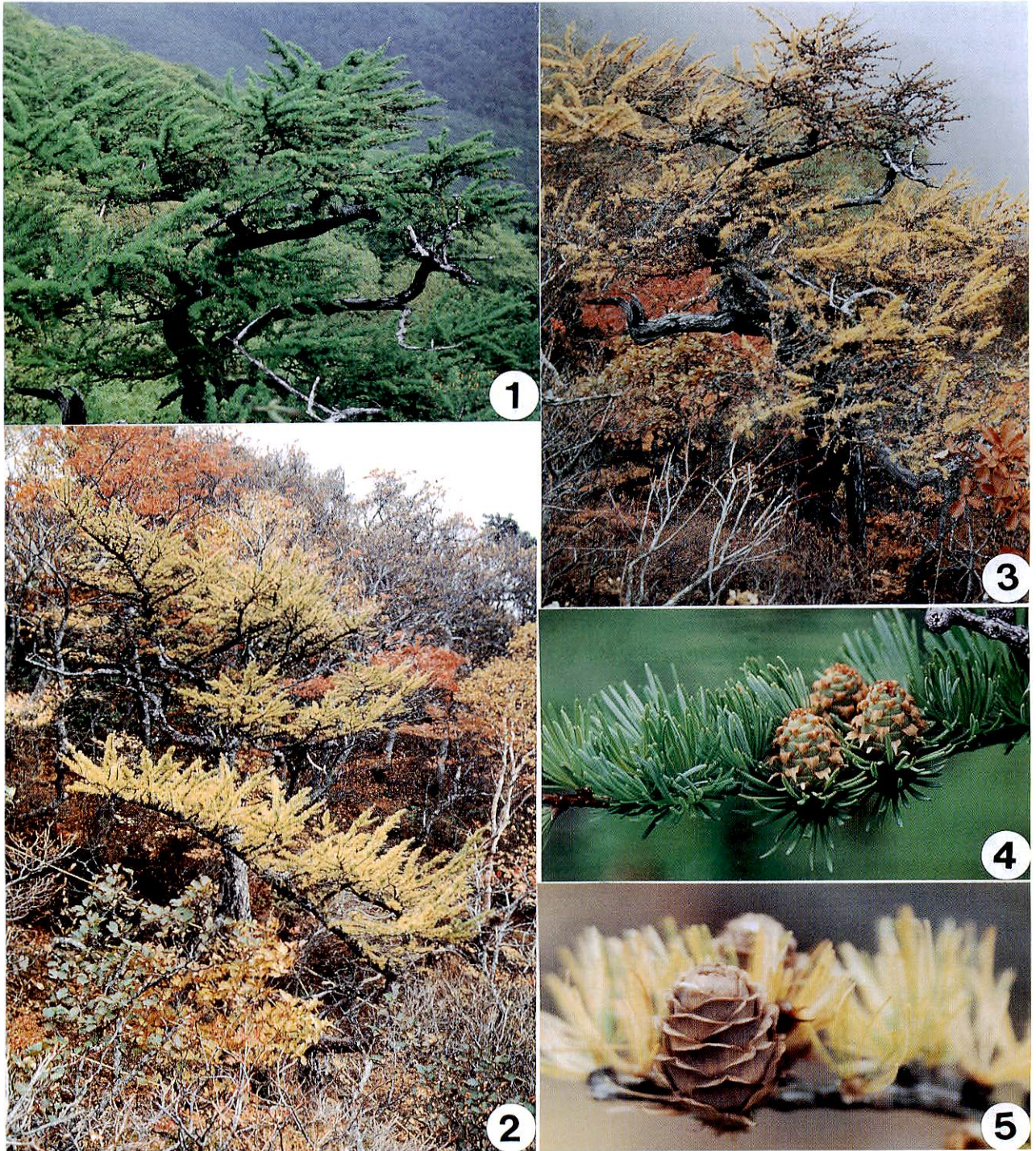


巻頭写真 南蔵王馬の神岳の「カラマツ」 (Isolated distribution of *Larix* on Mt. Manokami, Zao Mts., Tohoku District)



馬の神岳の「カラマツ」。新緑期は1995年6月20日，紅葉期は1995年10月10日に撮影。1：実に沢山の花を付けていた。2：カラマツはミヤマハンノキ，ダケカンバ，ブナ，ナナカマドなどにほとんど埋もれている。3：幹は内部が腐り，外側だけで生きている。4：やや大きめの若い球果。種鱗が4段半くらいある。5：成熟した球果。種鱗は3～4段で本州中部のカラマツより2～1段くらいは少ないように見える。



蔵王連峰の南部、屏風山のすこし南から東に出た枝尾根に標高 1551 メートルの馬の神岳（まのかみだけ）という小さなピークがある。この頂上付近に「カラマツ」の小集団が 1932 年に発見され、その後幾多の研究者が調査してきている。そして、当初は 30 個体以上あったと言われるものが、1960 年代頃には 15 個体くらいに減り、今では 12 個体（自分では 10 個体しか確認していない）に減少している。いずれの個体も風衝を受けて変形しており、植栽木のような円錐形には程遠い（写真 1-3）。戸沢俊治（1994）によると 1990 年時点で幹直径は 10.5-43.5 センチ、樹高は 1.7-4.9 メートルと大変低い。直径約 18 センチの枯死した幹の部分で 315 年の年輪が数えられている。また、生育環境は、かつては岩礫が露出していたそうだが、今ではブナ、ダケカンバ、ミネカエデ、ミヤマハンノキなどがはびこり、カラマツは樹冠部が辛うじて上に出ている程度である（写真 2）。その幹を見ると、一応まともなものもあるが、写真 3 に見るように、幹の大部分が腐り、ごく一部で樹体を支え、水分を供給しているようなものもある。まさに、氣息奄々という言葉がぴったりである。さらに、1995 年は球果の成り年で、いずれの個体にもびっしりと花が着いてしまった。これは悪くするとこの年で枯死するものが出るかも知れないと思い、母樹の保護と更新を図るように青森営林局に勧めた。幸いこれらのカラマツは「天然記念物」になっていない（青森営林局・仙台営林署によって嚴重に保護されている）ので、保護のために現状を改変することは可能であった。施業は母樹付近の広葉樹のある程度の除伐、枝打ちとカラマツの自生個体近くの植生をはぎ取り、天然に種子が落ちて発芽出来るようにするものである。種子が散布される前という事で、その作業は 9 月中旬に行われた。このように目に見える程近い将来に絶滅することが明らかな植物をどう保護するか、はなかなか難しい問題だが、絶滅するのはそれが自然の摂理だ、とって何もしないのは研究者のとるべき態度ではあるまい。

さて、表題に「カラマツ」と書いたのはこれが本州中部にある正真正銘のカラマツ、いわゆる「ニホンカラマツ」と同じものなのかどうか物議をかもしているからである。写真 4、5 に見るように球果は小さく、種鱗数も少なく、グイマツによく似ている。最終氷期の球果化石の研究を踏まえて、矢野牧夫（1994a, b）はグイマツとカラマツの雑種が遺存したものである可能性を指摘した。鈴木・吉川（1995）はカラマツの最終氷期における地方的な変異の中の東北地方の集団の遺存の可能性を述べている。この論議に一つの答えを用意したのが白石 進（1994）の DNA による系統解析である。これによると馬の神岳のものはニホンカラマツとクレードをなし、一方グイマツとチョウセンカラマツがクレードをなすというものである。その示唆する所は、これがグイマツである、あるいは雑種である、という事は支持されない、という事である。しかし、その本当のところはまだまだ分ったとはいいい難い。最終氷期の球果、花粉、材などの化石も含めた分子系統学的な研究が必要で、今、それに着手したところであるが、なかなか道は遠いようだ。

なお、本記事中の引用の多くは 1994 年に盛岡及び現地で行われた「第 1 回林木育種セミナー「隔離分布する天然生北限カラマツの特性と保存」」の記録が（社）林木育種協会（〒102 千代田区六番町 7）からこのほど出版された同書名の資料（定価送料込み 4500 円）による。値段ほどの内容は全く無いが、写真や地図、過去の文献のものっており、資料性は高い。前述の施業に伴って林道からの登山道が整備された。登山道入口から 3 キロ、約 2 時間の道のりである。チャンスがあったら是非訪ねて欲しい。

文献 林木育種協会. 1994. 第 1 回林木育種セミナー「隔離分布する天然生北限カラマツの特性と保存」. 96pp. 林木育種協会, 東京. 白石 進. 1994. 馬の神岳のカラマツはニホンカラマツか, グイマツか? 第 1 回林木育種セミナー「隔離分布する天然生北限カラマツの特性と保存」: 73-79, 林木育種協会, 東京. 鈴木三男・吉川純子. 1995. 9・11 層及び 13 層堆積時の森林植生の復元. 「富沢・泉崎浦・山口遺跡 (8) 富沢遺跡第 88 次・89 次発掘調査報告書」, 68-71. 仙台市教育委員会. 戸沢俊治. 1994. 天然生北限のカラマツ林. 第 1 回林木育種セミナー「隔離分布する天然生北限カラマツの特性と保存」, 53-62. 林木育種協会, 東京. 矢野牧夫. 1994a. 日本列島北限「カラマツ」球果の変異とその古植物学的意味. 第四紀研究, 33: 95-105. 矢野牧夫. 1994b. 第 1 回林木育種セミナー「隔離分布する天然生北限カラマツの特性と保存」, 33-43, 林木育種協会, 東京.

(鈴木三男 Mitsuo Suzuki)